

(研究ノート)

臨地実習指導のなかで 臨床指導者が看護学生から感じた「看護師の役割」

The “Roles of Nurses” That a Clinical Instructor Senses from Nursing Students in the Instruction of a Clinical Practicum

原 本 久美子*
Kumiko HARAMOTO

Abstract

I conducted a case study of an example of a descriptive survey in order to clarify the “roles of nurses” that an instructor sensed from students in the instruction of a clinical practicum. My study revealed the following. 1. Student and instructor were in a “relationship to learn and deepen nursing” through patients. 2. The “roles of nurses” that an instructor sensed from students was to “listen” to the stories of patients, to “understand the thoughts” of patients, and to “stay close” to patients. 3. An instructor created situations and scenes that would allow students to find meaning in nursing from their interactions with patients by experiencing respect for patients, “listening” to patients, “understanding the thoughts” of patients and “staying close” to patients. 4. An instructor’s self-growth as a nurse and nursing professional was encouraged through student instruction, and an instructor was deepening the role of nurses. The “roles of nurses” that an instructor sensed from students were nurtured in the clinical practicum and were roles that would enhance the quality of students’ subsequent nursing as nursing professionals.

キーワード：看護師の役割, 臨床指導者, 看護学生

I はじめに

医療の高度化, 複雑化する高齢化社会は, 多職種がチームで連携し各職種が専門性を発揮し独自の役割を果たすことが求められる。

そこで, 看護師は実際どのような役割を果たしているのか, 臨床看護師を対象に「看護師の役割」を発揮できたと実感したときの状況や場面の記述調査を実施した。この調査で, 看護学生(以下, 学生)に「看護師の役割」を実感したという臨床指導者(以下, 指導者)の記述に出会った。

* 関西国際大学保健医療学部

本来、学生は看護を学ぶ途上で看護者としては未熟といえる。それゆえ、看護専門職者として経験を積んだ指導者が、学生に感じた「看護師の役割」とはどのようなことか明らかにしたいと考えた。指導者が学生に感じた「看護師の役割」を明らかにすることは、学生が、臨地実習（以下、実習）でどのように「看護師の役割」を学び、どのような状況や場面で「看護師の役割」を發揮しているのか、その一端がわかり、同時に指導者が捉えている「看護師の役割」について把握できると考えた。

そのため、本研究では、学生に「看護師の役割」を感じたと記述した指導者の中から状況や場面の把握ができた一事例を取り上げ、実習指導で指導者が学生から感じた「看護師の役割」について明らかにすることを目的に考察した。

II 研究目的

実習指導において、指導者が学生から感じた「看護師の役割」について明らかにする。

III 研究方法

1. 研究デザイン：事例研究
2. 調査対象：5年以上の臨床看護経験（以下、臨床経験）のある看護師。なお、「5年以上の臨床経験」としたのは、日本看護協会が専門看護師、認定看護師の資格要件のひとつに通算の実務研修5年以上と規定していること、中堅看護師の定義で最も多い臨床経験が5年以上のため、「看護師の役割」を主体的、自律的に果たした看護の経験を持つ年数であり、看護専門職として専門性をもって「看護師の役割」を選択、記述できると考えたためである。
3. 調査内容
 3. 1. 対象者の属性：①性別、②臨床経験
 3. 2. 指導者が学生に「看護師の役割」を發揮できたと実感したときの状況や場面の自由記載の記述。

本研究において、記述内容に状況や場面を求めたのは、記述者が「看護師の役割」を実感したときは、実際に実践された看護の内容であり、指導者にそのときの患者と学生の状況や場面を記述をとおし語ってもらい分析することで、学生に実感した「看護師の役割」を明確化できると考えたためである。
4. データ収集方法：5年以上の臨床経験のある看護師で、東京都内で開催された50名以上が参加する研修会参加者、及び300床以上のA公立総合病院の看護師、計238名に依頼した。依頼に際しては、研修会責任者と病院の看護部長を通し、研究依頼文と無記名の質問紙、及び返信用封筒を配布してもらい、個人の郵送での返信により回答を得た。
5. 分析方法：学生に「看護師の役割」を感じたと記述した指導者の事例の中から、状況や場面の把握ができたものを取り上げた。その結果、一事例が該当しその内容を基に、以下のように時系列に沿って分析した。
 5. 1. 指導者が学生に「看護師の役割」を發揮できたと実感したときの状況や場面の記述内容の概要を、文脈を損なわぬように抽出した。

5. 2. 指導者や看護師は、学生が受け持つ前の患者をどのように捉えていたかを抽出した。
5. 3. 指導者は、学生が関わることで患者の変化をどのように感じたかを抽出した。
5. 4. 指導者が、実習指導をしている中で、学生に感じた「看護師の役割」を抽出した。

6. 倫理的配慮

本研究は、B大学倫理委員会の承認を受けた後、調査を依頼した研修会責任者と病院看護部長に、依頼文をもとに、口頭で説明し文書への記名によって承諾を受けた。調査対象者には、文書で匿名性の確保とデータはコード化すること、研究参加は自由意思で拒否または中断しても不利益はないこと、結果は発表し論文にまとめること、データは厳重に保管し、研究目的終了後は消去すること、質問紙への記述と個別封筒での郵送による返信により研究承諾を得たとする旨を説明した。

本調査は「郵送による無記名の自記式調査」であり、同意をした場合のみ、自記式で記述したものが、個別の返信用封筒で送付されるため、拒否権が十分に保証され、調査協力への任意性が担保されていると考えた。

IV 結果

148名から郵送による個別での回答が得られ、その中から、未記入や状況や場面の把握ができない記述を除いたものを有効回答とした（有効回答率63,5%）。本研究は、この内、学生に「看護師の役割」を実感したと記述した指導者の中から、状況や場面の把握ができた一事例を取り上げた。

1. 対象者の概要

女性で、臨床経験は14年であった。

2. 指導者が学生に「看護師の役割」を実感したときの状況や場面の概要

「臨床で看護師になって14年目のときであった。患者Cさんは老年期にあり、手術後に呼吸器や創部等に生じた複数の合併症によって、回復が遅れ悲観的な訴えが目立つ依存的な状況であった。また、Cさんは私の担当患者でもあった。学生の実習指導を担当し、1年目の私は、Cさんを受け持ち患者の一人として、学生につけたところ、Cさんはみるみる回復し、看護師の関わり方一つで患者が変わっていくことを実感した。学生をとおし、自分の患者を少し遠くからみられ、担当看護師としての自分の関わり方を振り返ったり、患者の思いも知るきっかけとなり、看護師の役割の振り返りができた事例であった。」との記述であった。

事例は、指導者が自分の担当患者で老年期のCさんを受け持った学生から感じた「看護師の役割」を述べたものであった。Cさんは、手術後に複数の合併症を生じ、回復への不安を募らせていた。しかし、学生が受け持つとみるみる回復し、担当看護師としての自分の関わり方や、看護師の役割の振り返りができたという内容で、指導者が注目したのは、「学生がついてからの患者の回復」であった。

3. 指導者や看護師たちが捉えていた、学生が受け持つ前の患者の状況

Cさんについては、「老年期にあり、手術後に呼吸器や創部等に生じた複数の合併症によって、回復が遅れ悲観的な訴えが目立つ依存的な状況であった。」との記述から、老年期での手術と度重なる合併症の回復遅れが、体力的、心理的にも不安を増していた。そのため、「悲観的な訴え」が目立ち、看護師たちは、本人は病状を深刻に受け止め、自分で可能なことも他者に委ねる消極的

行動を生じている、と捉えていた。

4. 指導者は、学生が関わることで患者の変化をどのように感じたか

4. 1. 患者が「みるみる回復」したのは、学生の関わりの効果が大きい

「学生につけたところ、Cさんはみるみる回復し、看護師の関わり方一つで患者が変わっていくことを実感した。」との記述からは、患者が回復したのは、学生の関わりの効果が大きいと感じていた。「みるみる」とは、一般には、明らかにという意味合いを含むとされる。そのため、それまで遅れていた回復が、他者から見ても明らかにわかるほど、急激に回復した様子を「みるみる回復」と表現していた。また、この回復は、学生がCさんを受け持った時期と重なったため、学生の関わりがCさんの回復に効果的に影響したと感じていた。一方、それまでの治療の効果が現れたときと、学生の受け持った時期とが重なり、相乗効果を来したといえなくもない。しかし、「学生につけたところ、Cさんはみるみる回復」と記述されていることから、治療効果を加味しても、それまで悲観的な訴えが目立つとされた状況から、回復を促進したのは、学生の関わりが大きいと感じていた。

4. 2. 学生が、「聴く」ことで患者の「思い」本音を引き出した

「患者の思いも知るきっかけとなり、担当看護師としての自分の関わり方を振り返ったり、看護師の役割の振り返りができた事例であった。」との記述からは、指導者は担当看護師として、学生をとおし、Cさんの「思い」を知ったことが、自己を振り返る学びの機会になったと述べていた。つまり、指導者は、それまで担当看護師としてCさんと関わっていたが、本来の「思い」に気づけなかったことを学生の指導をする中で知ったと述べていた。それゆえ、指導者は、担当看護師として、Cさんの「思い」に気づけなかった自分と、Cさんの「思い」に気づいた学生との関わり方について比較し振り返りをしていた。指導者は、Cさんとは、それまでも、担当看護師として関わり、話も聞いていたことや、Cさんも自分の「思い」を看護師たちに話してはいた。しかし、度重なる合併症で病状が好転しないため、話す傾向は同じになり、Cさんの「思い」は「悲観的な訴えが目立つ」と捉えられた。

一方、学生は、回復が遅れた患者体験をCさん本人から直接きくことで、その「思い」の一端に触れられた。そのため、学生はCさんに関心を寄せ、日々寄り添い、本人の話を「聴く」ことができた。Cさんは、自分の話を「聴く」学生に、それまでの率直な思いを話し、その結果、学生はCさんの本来の「思い」、即ち、本音を引き出すことができた。

4. 3. 学生が思いを「聴く」ことで患者は癒され、回復への気力を高めた

学生は、Cさんの「思い」を知り、ケアに反映できたことも、回復促進につながっていた。つまり、学生は、指導者から指導を受けケアを実施するため、自分が行うことの意味付けがなされた。一方、指導者は、学生の気付きやCさんの「思い」をケアに反映できるよう考慮し指導した。それゆえ、学生が考えたケアは、Cさんの意向を尊重したCさんに添った内容に繋がった。また、Cさんは、自分の「思い」を共有できる学生が居たことで、それまでの悲観的な気持ちが癒された。つまり、学生が寄り添い、思いを「聴く」ことで患者は癒され、回復への気力が高まった。

実際、学生が実習で実施できるケアは限られる。しかし、学生はCさんの思いを尊重し、回復が遅れている中で、必要なケアを考えたことで看護の動機付けもなされた。ゆえに、指導者は学生が考えたCさんのケア実施に向け、「状況」や「場」を捉えた指導をしていた。その結果、Cさんは自分の思いを配慮しながらケアをする学生を「自分の看護者」として受け入れ、ケアが継続

される中で、Cさん自身も回復の兆しを実感し、自己回復力促進に至った。

5. 指導者が、実習指導をしている中で、学生に感じた「看護師の役割」

「学生の実習指導を担当し、1年目の私は、Cさんを受け持ち患者の一人として、学生につけたところ、Cさんはみるみる回復し、看護師の関わり方一つで患者が変わっていくことを実感した。学生をとおし、自分の患者を少し遠くからみられ、担当看護師としての自分の関わり方を振り返ったり、患者の思いも知るきっかけとなり、看護師の役割の振り返りができた事例であった。」との記述は、指導者としての経験は少ないが、学生を指導することで学びが大きいことを述べていた。事例は、学生をとおしCさんの本来の「思い」を知ったことが、担当看護師としての自身や看護師の役割までと、振り返っていたことから、本来、この指導者は「患者の思い」を大切に考え関わっていた看護師といえた。そのため、Cさんの「思い」を大切にケアを行う学生に、指導者は「看護師の役割」を感じ、自己の看護や「看護師の役割」を振り返る事例となった。

それゆえ、臨床経験を積み、学生を指導することは、指導者自身も新たな刺激を受け、学生とともに看護をもう一度考え学ぶ機会になっていた。そのため、指導者も看護専門職として、学生指導という新たな役割を果たしつつ自己成長につなげていた。

V 考察

1. 実習における学生と指導者との関係について

パトリシア・ベナー (Patricia Benner, 以下、ベナー) は、看護師の臨床技能習得を、初心者、新人、一人前、中堅、達人まで5段階とし、その中で学生は「初心者」に位置づくとしている。また、ベナーは¹⁾、「新人から一人前に至る中で、患者が語る病の体験を聴くことが、その後の看護師としての質的变化・飛躍に効果的に影響する」と述べている。「聞く」とは一般的に、自然に耳から入ってくるのに対し、「聴く」とは、自らが相手に関心を持ち、相手が言いたいことを「身を入れてきく」、つまり注意深く目や耳を傾け「きく」ときに、「聴く」ことができるとされる。

今回、Cさんが「みるみる回復」したのは、「初心者」の学生が、病人の体験を本人から「聴く」ことで、Cさんの「思い」を知りケアに反映できたためともいえた。つまり、学生が患者から病の体験を「聴く」ことは、手術後に辿った病人の「思い」を知る機会であり、ケアの糸口を見出したことで、実習での学びを深めたといえた。そのため、Cさんの回復を促進したのは、患者と看護者である学生、お互いの相乗効果によるものと考えられた。

一方、「初心者」の学生に比し、指導者は臨床経験14年であり、臨床経験5年以上とされる「中堅」以上の、経験知と直感的な状況判断で看護実践ができる「達人」の域に近いと考えられた。

徳永らは²⁾、「学生は、実習での体験から関わりの意味や患者の思いを知り、未熟ながらも自己の『看護観』を芽生えさせる」、藤川らは³⁾、「看護の動機づけになるよう、看護場面に触れる機会を増やすことが重要で、患者との関わりの中から看護を見出せるように実習を支援していく必要がある」と述べている。一方、藤岡は⁴⁾、「学生は受け持ち患者との関わりを中心にさまざまな体験をし、自分なりに自分の体験に意味付けする学習活動を行っていると考えている。しかし学生一人ではひとりよがりの解釈になったり、貴重な体験が意味づけされずに流されてしまったりする」と指導者が看護視点を捉え、学生に関わる必要性を述べている。

つまり、「初心者」の学生が、患者の体験を「聴ける」よう、「達人」の域に近い指導者が状況や場を設定し指導したことで、学生がCさんの思いを知ることにつながり、実習の学びを深めたといえる。ゆえに、学生はCさんを受け持ち、関わる中でケアすること、つまり体験を意味づけ、学生なりの看護に対する考え、「看護観」の形成や「看護師の役割」を見出したといえる。そのため、学生が、患者の思いを「聴く」大切さを、看護の手応えとして感じたとき、「聴く」ことが意味付けられ、自己の「看護師の役割」として位置づくといえる。

一方、指導者は、学生から患者の「思い」を知るきっかけを得たことで、担当看護師としての自己の関わり方や、看護師の役割を振り返っている。実習指導について中垣は⁵⁾、「学生の発達を捉え自分の過去の問い直しや振り返りの中で、相互発達の関わりでの体験で、その指導には、指導者の看護観が現れる」としている。指導者として、学生がCさんに関わり、「みるみる回復」する様子から学生のことを評価し「看護師の関わり方で患者は変わる」と指導者は感じた。即ち、それまでの臨床経験を重ね、いつしかあたりまえになっていた「看護師の役割」に、改めて向き合い、看護師としての自身の振り返りを行っていた。この振り返りから、学生をとおし、かつての自身も看護を学ぶ中で大切にしてきた看護への思い、「看護観」に触れ、過去の体験の問い直しや学び直しにつながったといえた。つまり、指導者自身も後輩を育てるという、「看護師の役割」の中で、学生とともに看護を学び直し深めていたといえる。このことから、学生と指導者は、患者をとおし「看護を学ぶ深める関係」といえた。そのため、指導者は、学生との看護を学ぶプロセスを踏み、学生の気づきをきっかけに、さらに自己の「看護観」、「看護師の役割」を深化し、学生に還元するという学びの循環がされていたといえる。

2. 指導者が学生指導をとおし学んでいたこと

指導者の多くは、実習指導は負担感もある一方、看護の質や自己の能力が向上する、と肯定的に捉えているともいわれる。本事例の記述者である指導者は、学生が気づいたCさんの「思い」を具体化できるよう指導しケアにも発展させていた。つまり、学生が体験から、自身で看護する手ごたえを感じられるよう指導していたといえる。そのため、学生にCさんを患者側の視点から捉えさせたことで、それまで、医療者には直接は伝えにくかった「思い」、即ち本音を知ることができたといえる。このことで、Cさんと学生間、学生と指導者間、Cさんと指導者（担当看護師）間に、Cさんの看護について相互に相乗効果が生じ、学生は一層、Cさんの思いを尊重した関わりに繋がったと考えられる。

学生は看護においては技能も含め、初心者で体験や経験をベースに指導するには限界がある。患者の置かれた「状況」や「場面」によっては、患者が「思い」を語れず、ケアに至らぬ場合もある。特に、手術療法など治療に直結することは、患者は伝えにくいともいわれる。

そのため指導者は、学生が気づけるよう、患者の思いを補足し、置かれた状況や行動を「語り、見せる」ことや、病人の体験に近付けるような指導の工夫が必要になる。それは、学生が主体的に患者に関心を寄せ、必要な看護を見出すためである。看護経験の蓄積がない学生が看護を学べる「場面」を、タイミングを見極め、設定できる能力も求められる。

学生が実習で学ぶ「看護師の役割」は、一人の受け持ち患者をとおし、自ら患者に関心を寄せることから始まる。ゆえに未熟でも、臨地で学生が果たす「看護師の役割」とは、受け持ち患者に、関心を寄せその人から「聴く」、「思いを知る」、「関わる」、「寄り添う」という、個人を尊重したケアの基本であった。そのため、指導者が学生から感じた「看護師の役割」は、何れも患者

をとおして学ぶため、患者の居る臨地で実習でのみ育まれる役割といえる。

臨床経験について、勝原は⁶⁾、「単に回数を重ねるだけではなく、看護ケアの経験を積むことで、修得したことを自分の中で統合させ、それまでとは異なる判断や洞察を可能にする。」と述べている。洞察とは、一般に物事を見通し本質を見抜く能力とされる。そのため、指導者が、臨床経験をどのように反映し同じにみえがちなケアの中に、学生の気づきをどのようにつなげられるか、学ぶ看護を予測した指導も求められるといえた。指導者は、学生の指導は1年目であるが、それまで修得してきたことを、学生が患者と関わり、関係性をとる中に、繋げられるよう関わっていた。これは、日々、成長する学生から、指導者も刺激を受け、学生にとって日々の患者との関わり、ケアが、その後の学生の看護の質や看護観形成につながり、「看護師の役割」を見出すことをより実感したためといえる。

臨地実習における指導者の学びについて、中垣は⁷⁾、実習指導は、「学生の発達を捉え自分の過去の問い直しや振り返りの中で、相互発達の関わりでの体験」と述べている。つまり、実習において、学生と指導者は、患者をとおし、看護を学ぶ立場と教える立場であると同時に、指導者は学生をとおし、かつての自己を振り返り、学生の成長発達を捉えるという、相互に関連し看護を学び深める関係にあるといえた。

VI おわりに

今回の事例研究をとおし、指導者は、学生の「気づき」を大切に、そのときどきの「状況」や「場面」を設定し指導していた。そのため、学生は、患者との関わりをとおし「話を聴く」こと、「思いを知る」こと、「寄り添う」ことを学び、ケアに反映することで患者から看護の手応えを感じていた。また、指導者は、学生に「看護師の役割」を感じたことで、自己を振り返り、看護専門職者としての自己成長が促され、看護師の役割を深めていた。

本事例研究により、実習指導で指導者が学生から感じた「看護師の役割」の一端を知ることができた。また、学生が患者とどのような「状況」や「場面」で関わり、どのように「看護師の役割」を学んでいくのか、事例をとおし確認することができた。しかし、事例研究のため一人の指導者の感じた結果であり、今後は、さらに事例を増やし、どのような「状況」や「場面」設定をすることで、学生は「看護師の役割」を意味付け学んでいくのか、より具体化できるよう今後も検討を重ねたい。

VIII 結論

今回、実習指導のなかで、指導者が学生から感じた「看護師の役割」について、事例研究をした結果、以下が明らかになった。

1. 学生と指導者は、患者をとおし「看護を学び深める関係」にあった。
2. 指導者が学生から感じた「看護師の役割」とは、患者の話を「聴く」こと、患者の「思いを知る」こと、患者に「寄り添う」ことであった。
3. 指導者は、学生が患者との関わりから、その人を尊重し、「聴く」こと、「思いを知る」こと、「寄り添う」ことを経験し、看護の意味づけができるよう状況や場面を設定していた。

4. 指導者は、学生指導をとおり、看護師、看護専門職者としての自己成長が促され、看護師の役割を深化していた。

指導者が学生から感じた「看護師の役割」は、臨地実習で生まれ、看護専門職として、その後の看護の質を高める役割であった。

謝辞

本調査研究にあたり、ご多忙の中、ご協力いただきました皆さまに、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 井部俊子訳, ベナー看護論—初心者から達人へ, 東京: 医学書院, 269頁, 2005
- 2) 徳永基与子, 安斎三枝子, 鯨坂由紀, 基礎看護学臨地実習での学生の体験と認識についての検討, 京都府立看護短期大学紀要, 32号, 33-39頁, 2007
- 3) 藤川幸子, 看護基礎教育における臨地実習の教育方法, 日本看護研究学会雑誌, 135-137, 2007
- 4) 藤岡完治, 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック 第2版, 医学書院, 26頁, 2004
- 5) 中垣明美, 実習指導者の実習指導の体験を発達面から捉えた研究, 2011
- 6) 勝原裕美子, 看護師のキャリア論新定版, ライフサポート社, 2012
- 7) 5) 中垣明美, 再掲

【参考文献】

- ・池川清子, 看護 生きられる世界の実践知 (フロネーシス), ゆみる出版, 2008
- ・勝原裕美子『看護師のキャリア論 新定版』, ライフサポート社, 2012
- ・厚生労働省, 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2011
- ・原本久美子, 保健医療福祉チームにおける「看護師の役割」とは—臨床看護師が自覚する役割の内容分析—, 関西国際大学研究紀要第17号, 2016
- ・屋宜譜美子, 目黒悟「教える人としての私を育てる」看護教員と臨地実習指導者, 医学書院, 2010
- ・佐藤紀子『看護師の臨床の「知」—看護職生涯発達学の視点から』医学書院, 2007
- ・鈴木美和: 亀岡智美, 舟島なをみ「看護職者の『職業経験の質』と『看護の質』との関連, 看護教育学研究, 12巻2号, 2009
- ・大辞林第三版
- ・藤岡完治『関わることへの意志, 教育の根源』国士社, 87頁, 2000
- ・舟島なをみ『質的研究への挑戦 第2版』医学書院, 2009
- ・中垣明美, 千葉朝子, 臨地実習指導者に関する文献検討と今後の課題—生涯発達の視点から—, 日本看護学教育学会学術集会講演集, 2008
- ・藤川幸子, 実習指導と看護観育成に関する研究, 2003